ウメモト　インフォメーション

２０２２年　９　月　28　日　　担当　アノジ

石化原料のナフサ、半年で５割安　アジアの需要後退

石油化学製品の原料となるナフサ（粗製ガソリン）がアジア市場で値下がりしている。スポット（随時契約）価格は１トン 630 ドル台と、ロシアのウクライナ侵攻で高騰した３月上旬に比べ５割安い。原油安に加え、中国の景気停滞でアジアの石化需要が鈍っている。国内の値上げラッシュの一因だったプラスチック製品の値上がりに歯止めがかかる可能性がある。

アジアで取引されるナフサのスポット価格は９月 27 日現在で１トン 633 ドル前後。ウクライナ侵攻後の３月７日には、原油高を受けて 1184 ドル前後と 2008 年７月以来、約 14 年ぶりの高値をつけていた。その後は下落が続き、９月８日には直近高値より 47%安い 626 ドル前後と、21 年８月以来の低水準まで下がった。

ナフサはガソリンや軽油と一緒に原油から精製する。石化会社はナフサをエチレン、プロピレンといった基礎化学品に分解し、さらにポリエチレン、ポリプロピレンなどの合成樹脂（プラスチック）を作る。基礎原料であるナフサの価格は、幅広い石化製品の価格指標となる。

アジアで原油価格の指標となる中東産ドバイ原油は３月、約 14 年ぶりの高値となる１バレル 128.8 ドルまで上昇した。ウクライナ危機で、ロシア産原油の供給が滞るとの思惑が広がったためだ。だがその後は米欧中銀の利上げによる景気後退懸念で反落。いまは直近高値に比べて３割安い。

原油安に加えてナフサ価格を押し下げたのが、中国の石化需要低迷だ。中国では厳格なゼロコロナ政策で景気が停滞している。中国国家統計局によると、石化需要の目安となるエチレンの生産量は８月、222 万トンと前年同月に比べて 9%減った。

伊藤忠総研の武田淳チーフエコノミストは「中国ではロックダウンの影響で消費行動に慎重さが残る。不動産景気の減速で建設工事も落ち込んでおり、幅広く使われる化学製品に景気の弱さが波及している」と話す。

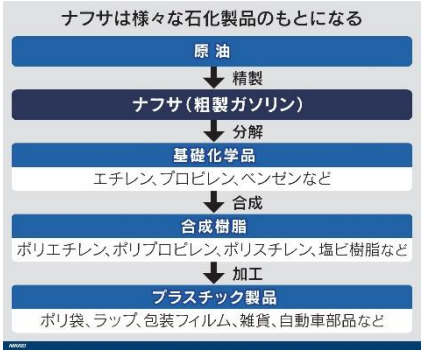
中国の需要低迷でアジア全域の石化製品に余剰感が強まっている。石油化学工業協会（石化協、東京・中央）によると、低密度ポリエチレンとポリスチレンの 8 月の海外向け出荷量は、前年同月に比べて 4 割少ない。

国産のナフサ価格はアジア産などのナフサ輸入価格に連動して、四半期ごとに後決めする。4～6 月の国産価格は、3 月までのナフサ高騰を受けて前の期比 33%高い 1 キロリットル 8 万 6100 円と、過去最高値をつけた。プライムポリマー、日本ポリエチレン、日本ポリプロといった国内石化会社は、国産ナフサ高を理由に合成樹脂を値上げした。9 月現在の価格は 1 年前に比べて 2～3 割高い。

アジアのナフサ安で、7～9 月以降の国産ナフサ価格は落ち着きそうだ。円安が輸入価格を押し上げているが「22 年下期の価格は 7 万～8 万円で推移する」（藤本健介プライムポリマー社長）と、小幅下落を見込む声が多い。

石化協によると、1～6 月の主要 4 樹脂の国内出荷量は前年同期に比べて 3～9%少ない。7 月も前年同月を下回る。自動車の減産に加え、値上がりが需要に響いているとみられる。食品ラップ、トレーといったプラスチック製品のメーカーは、合成樹脂の値上がりを理由に値上げ交渉を進めるが、買い手の抵抗にあっている。

国産ナフサの価格が想定以上に落ちこめば、合成樹脂の高値を支える根拠が薄れる。需要家の値下げ要求が強まる可能性もあり、プラスチック製品の値上げが一段と難航する可能性がある。



日本経済新聞

２０２２年　９　月　28　日　　担当　アノジ

続落　1 ドル=144 円 80～90 銭で終了　米長期金利の上昇で

27 日のニューヨーク外国為替市場で円相場は小幅に 3 日続落し、前日比 10 銭円安・ドル高の 1 ドル=144 円 80～90 銭で取引を終えた。米長期金利が一時 3.99%と 2010 年 4 月以来、12 年ぶりの水準に上昇し、日米金利差の拡大を手がかりとした円売り・ドル買いが優勢だった。

欧米の主要中央銀行の金融引き締めが長期化する見通しが強まり、米長期金利の上昇が続いた。27 日はセントルイス連銀のブラード総裁がインフレ抑制のために粘り強く金融引き締めを続ける必要性を主張し、ミネアポリス連銀のカシュカリ総裁は「現在の引き締めペースは適切だ」と述べた。インフレ抑制を優先して大幅利上げを続ける米連邦準備理事会(FRB)と緩和を継続する日銀との金融政策の違いも意識された。

主要中銀の急激な金融引き締めが欧州を中心とした景気懸念につながっており、対ユーロなどでドル買いが続いたのも円の重荷となった。

一方、145 円に近づくと円は下げ止まった。日本政府が再び円買い・ドル売り介入を実施する可能性が意識され、円相場を下支えた。

この日の円の安値は 144 円 90 銭、高値は 144 円 39 銭だった。

円は対ユーロで小幅に上昇し、前日比 5 銭円高・ユーロ安の 1 ユーロ=138 円 85～95 銭で取引を終えた。

ユーロは対ドルで 6 日続落し、前日比 0.0015 ドル安い 1 ユーロ=0.9590～0.9600 ドルで終えた。イタリアで極右政権が誕生する見通しとなり、同国や欧州経済を取り巻く不透明感が一段と強まった。

ユーロの安値は 0.9570 ドル、高値は 0.9648 ドルだった。

日本経済新聞

２０２２年　９　月　28　日　　担当　アノジ

三菱商事、米国でアンモニア製造検討　最大年 1000 万トン

三菱商事が米テキサス州で燃料用アンモニアの製造拠点の立ち上げを検討していることが 27 日分かった。想定では 2030 年代前半に稼働を始める予定で、生産能力は最大で年 1000 万トンと、世界最大級の製造拠点となる可能性がある。三菱商事は今後数年かけて事業化できるか精査したうえで、具体的な事業計画や投資規模を検討する。

経済産業省が 28 日に主催する国際会議で、コーパス・クリスティ港（テキサス州）の運営を担う港湾当局と用地使用に向けた覚書を結ぶ。同港は米最大のエネルギー製品の輸出拠点で、三菱商事は生産するアンモニアを日本やアジア諸国などに輸出する。

アンモニアは天然ガスから水素と二酸化炭素（CO2）に分離し、水素を窒素と反応させて製造する。今回のプロジェクトでは製造過程で発生した CO2 を回収・貯留する「CCS」を活用することで「ブルーアンモニア」となる見通しだ。

現在の想定では 30 年代前半に稼働を始め、徐々に生産量を増やす方向で検討を進める。最大で年 1000 万トンまで生産能力を拡張する余地がある。日本政府は 30 年に 300 万トンの燃料用アンモニアの需要を見込んでおり、実現すれば約 3 倍の規模となる。

アンモニアは燃焼時に CO2 を出さないクリーンエネルギーとして注目されている。三菱商事は今回のプロジェクトのほか、カナダでは英シェルと、米国では石油・天然ガス大手の米デンバリー子会社と燃料用アンモニアの生産をそれぞれ検討している。三井物産もオーストラリアに工場を建設し、日本に年 100 万トン輸出する計画で、商社各社が世界でアンモニアの調達に動いている。

日本経済新聞

２０22年　9　月　28　日　　担当　アノジ

ロシア、来月ＯＰＥＣプラス会合で 100 万バレル減産提案か

石油輸出国機構（ＯＰＥＣ）と非加盟産油国でつくる「ＯＰＥＣプラス」が１０月５日に開く閣僚級会合で、ロシアが日量１００万バレル前後の減産を提案する公算が大きい。ロシアの考えに詳しい関係者が２７日、明らかにした。

原油価格は下落傾向にあるため、ＯＰＥＣプラスのもう一方の有力メンバーであるサウジアラビアも減産は可能と表明できる情勢になっている。

ただ４人のＯＰＥＣプラス筋は、閣僚間でまだ次回会合に向けた話し合いは始まっていないと述べた。

ＯＰＥＣプラスは、これまで米国など主要消費国からの増産要求に応じていない。それでも原油価格は、世界経済の先行き懸念やドル高を受け、今月になって急速に下げ足を速めている。

ロイター

２０２２年 ９ 月 28 日　担当 アノジ

パーム核油市況続落

パーム核油の市況が続落している。主産地のインドネシアでパーム製品の輸出規制が解除されたことに加え、中国のロックダウンなどの影響でトイレタリー向けの需要が悪化。2月に過去最高額の1ﾄﾝ当たり2600ﾄﾞﾙに達して以降右肩下がりとなり、9月上旬には1100ﾄﾞﾙまで下がっている。パーム油が増産期に入っているため、今後パーム核油も連動して下落し「1000ﾄﾞﾙを割り込むのも時間の問題」（市場関係者）になりそう。

パーム核油は昨季、主産地マレーシアなどの東南アジアでコロナ禍における労働力不足により搾油量が縮小。加えて、今年2月からのロシアのウクライナ侵攻にともない、植物油脂が全面高となり、2月には2600ﾄﾞﾙと過去最高を更新した。

その後、中国のロックダウンでトイレタリー向けなどの需要が減速。インドネシアが4月から輸出規制を実施したにもかかわらず、5月に2000ﾄﾞﾙを割り込んだ。規制は1カ月で解除されたものの、中国では引き続きロックダウンを各地で実施。さらに各国で物価高に見舞われたため、世界的にトイレタリーなどの消費が一段と冷え込んでいる。

こうしたなか、9月上旬時点で1100ﾄﾞﾙまで値下がりしている。パーム油が増産期入りで下げ余地があることから、連れ安になるとみる向きが多い。

化学工業日報

ウメモト　インフォメーション

２０２２年　９　月　28　日　　担当　アノジ

7月生産1.9％減

カーボンブラック

カーボンブラック協会がまとめた需給実績によると、7月の生産は前年同月比1・9％減の4万9349㌧、出荷は3・8％減の5万13㌧。

タイヤ向けが主体のゴム用ファーネスの生産は1・4％減、出荷は3・2％減、非ゴム用その他の生産は10・3％減、出荷は14・4％減少した。

また輸出は15・1％減の4860㌧、輸入は21・7％減の972㌧だった。国別輸入量は、数量の多い順に韓国が1・6％減、タイ32・4％減、中国34・0％減、米国1・3％増、インド44・8％減となった。

〔2022年７月カーボンブラック品種別実績〕　（単位：㌧、％）

品種		生産		出荷		在庫量	率(％)
		７月	累計	７月	累計		
ゴム用ファーネス	ＩＳＡＦ	8,934	59,189	9,048	56,992	22,112	244
	ＨＡＦ	22,483	149,235	22,875	150,248	20,649	90
	ＦＥＦ	8,133	56,744	8,407	55,418	9,861	117
	ＧＰＦ	4,367	24,914	3,722	24,031	4,118	111
	ＳＲＦ	2,198	18,309	2,753	18,622	3,226	117
	ＦＴ	935	5,731	829	6,034	1,389	168
	計	47,050	314,122	47,634	311,345	61,355	129
	（前年比）	98.6	99.2	96.8	98.4	106.2	
非ゴム用その他		2,299	17,946	2,379	18,659	8,910	375
（前年比）		89.7	101.0	85.6	93.0	123.0	
合計		49,349	332,068	50,013	330,004	70,265	140
（前年比）		98.1	99.3	96.2	98.1	108.1	

（カーボンブラック協会まとめ）

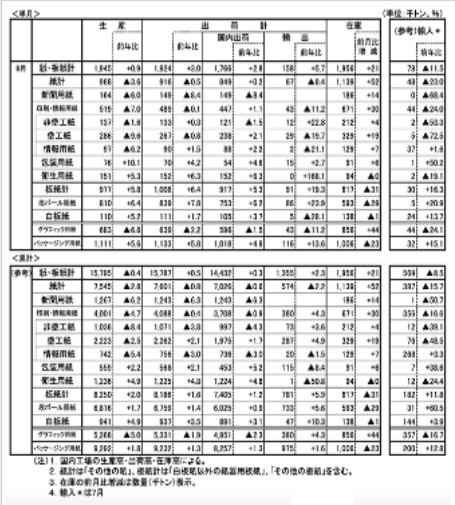
化学工業日報

ウメモト　インフォメーション

２０２２年　９　月　28　日　　担当　アノジ

8月印刷・情報用紙国内出荷、1.1%増で2ヵ月ぶりのプラス

2022年9月22日



<単月>

（単位 千トン、%）

		生産		出荷計						在庫		（参考）輸入＊	
			前年比		前年比	国内出荷	前年比	輸出	前年比		前月比増減		前年比
8月	紙・板紙計	1,845	+0.9	1,824	+0.0	1,756	+2.8	158	+5.7	1,958	+21	79	▲11.5
	洋紙計	966	▲3.6	916	▲0.5	849	+0.2	67	▲6.4	1,139	+52	48	▲23.0
	新聞用紙	164	▲6.0	149	▲6.6	149	▲9.4			186	+14	0	▲88.4
	印刷・情報用紙	515	▲7.0	485	▲0.1	447	+1.1	43	▲11.2	671	+30	44	▲24.0
	非塗工紙	137	▲1.8	133	+0.3	121	▲1.5	12	+22.8	212	+4	2	▲93.3
	塗工紙	286	▲0.9	267	▲0.8	238	+2.1	29	▲15.7	329	+19	5	▲72.5
	情報用紙	91	▲6.2	90	+1.5	88	+2.2	2	▲21.1	129	+7	37	+1.8
	包装用紙	16	+10.1	70	+4.2	54	+4.8	15	+2.7	91	+6	1	+50.2
	衛生用紙	151	+5.3	152	+6.3	152	+5.3	0	+168.1	94	▲0	2	▲19.1
	板紙計	917	+5.8	1,008	+6.4	917	+5.3	91	+15.3	817	▲31	30	+16.3
	段ボール原紙	810	+6.4	839	+7.8	753	+5.9	86	+23.9	593	▲29	5	+20.9
	白板紙	110	+5.2	111	+1.7	105	+3.7	5	▲26.1	138	▲1	24	+13.7
	グラフィック印刷	663	▲6.8	639	▲2.2	596	▲1.5	43	▲11.2	858	+44	44	▲24.1
	パッケージング用紙	1,111	+5.9	1,133	+5.8	1,018	+4.8	116	+13.6	1,008	▲23	32	+15.1

<累計>

（参考）	紙・板紙計	15,785	▲0.4	15,787	+0.5	14,432	+0.3	1,355	+2.3	1,958	+21	559	▲8.5
	洋紙計	7,545	▲2.8	7,601	▲0.8	7,026	▲0.6	574	▲2.9	1,139	+52	387	▲15.7
	新聞用紙	1,267	▲6.2	1,243	▲6.3	1,243	▲5.9			186	+14	1	▲50.7
	印刷・情報用紙	4,001	▲4.7	4,088	▲0.4	3,708	▲0.9	380	+4.3	671	+30	359	▲16.6
	非塗工紙	1,066	▲8.4	1,071	▲3.8	997	▲4.3	73	+3.6	212	+4	12	▲39.1
	塗工紙	2,223	▲2.5	2,262	+2.1	1,975	+1.1	287	+4.9	329	+19	79	▲48.5
	情報用紙	742	▲5.4	756	▲3.0	736	▲3.0	20	▲1.5	129	+7	288	+3.3
	包装用紙	555	+2.2	588	+2.1	493	+5.2	115	▲6.4	91	+8	2	+38.6
	衛生用紙	1,228	+4.9	1,225	+4.8	1,224	+4.8	1	▲50.8	94	▲0	12	▲24.4
	板紙計	8,259	+2.0	8,188	+1.6	7,405	+1.2	783	+5.9	817	▲31	182	+11.8
	段ボール原紙	6,816	+1.7	6,759	+1.4	6,025	+0.8	733	+5.6	593	▲29	31	+60.5
	白板紙	941	+4.9	931	+2.5	891	+3.1	47	+10.3	138	▲1	144	+3.8
	グラフィック印刷	5,268	▲5.0	5,331	▲1.9	4,951	▲2.3	380	+4.3	858	+44	357	▲16.7
	パッケージング用紙	8,265	+1.8	8,333	+1.3	8,257	+1.3	075	+1.6	1,008	▲23	203	+12.8

（注）1. 国内工場の生産量・出荷量・在庫量による。
2. 統計は「その他の紙」、板紙計は「白板紙以外の板紙用板紙」、「その他の板紙」を含む。
3. 在庫の前月比増減は数量（千トン）表示。
4. 輸入＊は7月

2022年8月 紙・板紙需給速報（日本製紙連合会調べ）

日本製紙連合会が発表した2022年8月の紙・板紙需給速報によると、紙・板紙の国内出荷は前年同月比2.8%増で2ヵ月ぶりのプラスとなった。用途別では、グラフィック用紙が1.5%減で7ヵ月連続のマイナス、パッケージング用紙が4.9%増で2ヵ月ぶりのプラスとなっている。

印刷・情報用紙の国内出荷は前年同月比1.1%増で2ヵ月ぶりのプラス。種類別では、非塗工紙以外がプラスとなっている。

その他の品種では、新聞用紙が8.4%減で15ヵ月連続のマイナスとなった一方、包装用紙が4.6%増で17ヵ月連続、段ボール原紙が6.2%増で2ヵ月ぶり、白板紙が3.7%増で4ヵ月連続、衛生用紙が6.3%増で10ヵ月連続のプラスとなっている。

Pj　web news

２０２２年　９　月　28　日　　担当　アノジ

ENEOS、発電用 C 重油を値上げ 7～9 月 9%

石油元売りの ENEOS は、主に電力会社が発電用に使う低硫黄 C 重油（硫黄分 0.3%）の 7～9 月期の価格を 4～6 月期に比べ 9750 円（9%）高い 1 キロリットル 11 万 6720 円に引き上げると決めた。引き上げは 7 四半期連続。円安などを反映した。

大手需要家と交渉を進めていたボイラー燃料に使う高硫黄 C 重油（硫黄分 3%）は、同 3530 円（4%）高い 1 キロリットル 9 万 7890 円となった。引き上げは 9 四半期連続。

原料の相場変動を反映する「フォーミュラ制」に織り込まれている重油の海外市況が下がったが、円安が進み値上げにつながった。

日本経済新聞